

あびこの文化

発行人 大洋
美崎 大野
我孫子市 高野山
250-23
04(7182)
0861

あけましておめでとーございいます

会長 美崎 大洋

平素は当会の活動に格別のご協力をいただき
ありがとうございます。

会員の皆様、昨年十一月頃から始まったと
されるコロナ第8波の中での新年をどのように
迎えられましたでしょうか？

激動の一年を振り返って

昨年は新型コロナウィルスとウクライナ戦争及び円
安による物価の高騰に翻弄された年でした。新型コロナ
ナに関しては第8波に陥りましたが、自粛要請もなく、
外国人観光客の受け入れも再開され、世間の様相は
コロナ前と変わらない状況となっているようです。

新型コロナが流行し始めた2020年春、これを克服
していくには、ワクチン、治療薬、そして集団免疫と言
われていましたが、3年経過して多くの感染者を出し
ても一向に収まることのないのが今の状況です。

2月のロシアによる侵攻で始まったウクライナ戦争
も、当初、数日で首都キーウは陥落すると見られてい
ましたが、西側諸国の支援とウクライナ軍の戦意の高
さにロシア軍は難渋し、出口が分からなくなっていま
す。戦争は始めるより終結させることの方が難しいと
言われますが、果たして出口戦略はあるのでしょうか？
今年こそはコロナも収束宣言が出て、物価も安定し、
緩やかに賃金も上昇して健全なインフレ状態になる日
本になることを願うばかりです。

国内では、痛ましい事故や事件がありました。4月、
知床半島の沖合を航行していた観光船「KAZU」(カ
ズワン)が「船首が沈んでいる」との通報を最後に消息
を絶ち、6日後に水深約120メートルの海底で船体
が見つかりました。沈没事故により、乗客乗員のうち
20人が死亡、6人の行方が未だ不明です。

安倍晋三・元首相が7月8日、奈良市の近鉄大和西
大寺駅前前で参院選の街頭演説中、背後から近づいた
男に銃撃され、亡くなりました。男の母親は世界平和
統一家庭連合(旧統一教会)に1億円以上を献金して
破産しており、男は「つながりがある」と思った安倍氏
を狙った」と供述しています。事件は世界中に衝撃を
与え、各国から弔意が寄せられました。

一方、海外で日本人が活躍した話題もありました。
2月の北京冬季五輪で日本代表が18個のメダルを
獲得しました。米大リーグ・エンゼルスの大谷翔平は、8
月9日のアスレチックス戦に先発投手兼2番指名打者
で出場し、10勝目を挙げ、「野球の神様」ペーブル
ス以来、104年ぶりとなる「2桁勝利、2桁本塁打」を
達成。10月5日の試合では、現在の大リーグ史上で初
めて、規定投球回と規定打席の両方に到達しました。

またサッカーのワールドカップ(W杯)カタール大会で、
森保一監督率いる日本代表は、強豪のドイツ、スペイン
を撃破し、日本中を熱狂の渦に巻き込みました。初の
8強入りは叶いませんでしたが、世界に日本サッカー
の進化を示しました。年末には日本代表の森保監督の
続投(4年後のW杯まで)が決まりました。

国内のスポーツでは若いアスリートの活躍と偉業が
ありました。

プロ野球・東京ヤクルトスワローズの村上宗隆が10
月3日、横浜DeNAベイスターズ戦で、シーズン56号
となる本塁打を放ち、王貞治の55号を超え、日本選
手の最多本塁打を更新しました。村上は打率、本塁打
打点と、全てリーグトップの成績を残し、史上最年少
(22歳)の三冠王に輝きました。8月にはプロ野球新記
録となる5打席連続本塁打も達成しました。その活
躍ぶりから「村神様」の呼び名が広まり、「2022年流
行語大賞」の年間大賞に選ばれました。またロッテの
佐々木朗希が4月10日、オリックス戦で28年ぶり16
人目となる完全試合を達成しました。また、この試合
で佐々木は13者連続で二振を奪い、プロ野球記録を
64年ぶりに更新しました。

女子ゴルフでは若手の活躍が目立ちました。山下美

夢有(みゆう、21)が最多タイの5勝で最年少の年間
女王に輝き、また毎回のようニユーヒロインが誕生す
るなど若手の台頭には目覚ましいものがありました。

若手の活躍はスポーツ界だけではなくありませんでした。
将棋の藤井聡太竜王が2月12日、王将戦七番勝負で、
渡辺明名人に4連勝してタイトルを奪取しました。
19歳6か月で、史上最初となる10代での五冠を成し遂
げました。10月12月に行われた竜王戦七番勝負で
は初防衛に成功。王位、叡王、王将、棋聖とあわせ、
五冠を堅持しました。今年1月から羽生善治九段と
王将戦七番勝負を戦うほか、今期の棋王戦や名人戦
でもタイトル挑戦の可能性が残っており、史上最初の八
冠への期待が高まっています。

当会の話題としては、2月、講演会「各地の将門伝
説・伝承を探る」を実施、コロナ感染者数高止まりと前
日降雪にも拘わらず、約70名の将門ファンが参加さ
れました。坂東市・取手市・柏市・守谷市(資料のみ)、
我孫子市から地元の将門伝説の披露がありました。

会報5月号から白樺文学館学芸員の稲村隆氏の4
回連載「稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会―」
が始まりました。タイトルの「稲村雑談」は志賀直哉が
熱海在任期に広津和郎らと雑談した速記をもとにし
たもので執筆者のお名前とは偶然の一致です。

6月5日(日)、あびこ市民プラザホールにて令和4
年度の総会が開催され、提案された議案はすべて原案
通り可決・承認されました。総会に先立ち午後2時か
ら同会場にて第四十回記念文化講演会が開催され、
村川夏子氏が「村川別荘と我孫子 嘉納治五郎との
絆をたどって」のテーマで講演されました。

コロナ下、当会としての行事が制限される中、「短歌
の会」と「放談くらぶ」は定期的に開催され、8月の放
談くらぶではヒマワリのベスト9回登頂という日本人
最多記録を持つ倉岡裕之氏が「山岳ガイドという仕
事」のテーマで講演、多くの登山ファンが集まりました。

10月、歴史文化関連五団体共同企画講演会「我孫
子市のも多様な地域博物館を考える」を実施しました。

本年も会の活動・運営に「ご協力をお願いします」。

連載④終

稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会へ―

我孫子市白樺文学館 学藝員 稲村 隆

(4)ポスト「我孫子・白樺派」―大正100年を迎えて考える我孫子の未来―

大正時代は1912年7月30日から1926年12月25日までの約15年間である。明治改元後、新政府は欧米列強へ追いつくため、1872(明治5)年暮れに従来の太陰太陽暦から太陽暦(グレゴリオ暦)へ改暦する。これは貿易など経済効率を企図したものであったといえよう。(参考:国立国会図書館「日本の暦 第一章 暦の歴史 江戸から明治の改暦」
https://www.ndl.go.jp/koyomi/chapter1/sz.html)

これは非常に画期であり、日本の文化にとっても改暦以前、以後では大きな違いを生んでいる。原田京平は歌人でもあり、手賀沼を詠んだ短歌は以前も紹介したが、もう少し紹介しよう。

火葬場の赤き焰のもえ上り

もえ上る時人のかげ見ゆ

こほろぎの声はそくして夜霧たつ

沼辺の道の行く行く寒し

雨の沼眺めつ、居ればわがこゝろ

見つむることくわびしさかさむ

風景を詠んでもいるが、我孫子での生活を詠んでいるということを考えてほしい。「和歌」と「短歌」の違いである。明治5年の改暦は、それ以前の春夏秋冬の季節感と時間感覚を変え、日本の風土と密着した暦(旧暦)から、世界共通、経済効率重視の暦(新暦)となった。近代以前の「和歌」が詠むのは非日常の「ハレ」であり、「花鳥風月」の心である。近代以後の「短歌」が詠むのは日常の「ケ」であり、「何気ない実生活」の心である。(参考:加藤孝男『近代短歌史の研究』明治書院、2008年)

落合直文を先駆けとして、正岡子規、与謝野鉄幹、佐々木信綱、若山牧水、石川啄木、斎藤茂吉ほか明治20年代以降歌人たちの動きは活発化する。原田は早稲田大学で教鞭もついていた窪田空穂に師事しており、投稿作品は見つかつていなかったが、昨年山田家コレクショント原田関係資料とのつながりから短歌雑誌『白樺』に寄稿していることを紹介したところである。話を元に戻そう。

以上は「和歌」「短歌」に関する話をしたが、話を大きくすれば個人的感覚ではあるが、1900年代、明治だどだいたい30年代前後から近代日本の文化が大きく花開き、近代の成熟度が増していくように思う。その後のいわゆる「大正浪漫」という言葉を耳にするが、それらが起こる背景には、その前段階があることを考えなければならぬ。もつとえば、物事、事件は突然発生するわけではないという、至極真つ当な話である。

今回の連載で私が伝えたかったのは、「我孫子」として白樺派を大事にする意味があるのか、活用するのが本当に我孫子のためであるのかどうか、それをする機運があるのか、醸成できるのかということだ。こんなことを書くことと響きを買うことを承知で、敢えて私見を述べる。

白樺文学館に勤めて早10年。地域博物館はどうあるべきか、我孫子にとつての白樺文学館はどういう存在であるべきか、旧村川別荘、杉村楚人冠記念館など近代別荘建築、いわゆる我孫子の「大正・昭和の文化遺産」と定義、ゾーン展開を企図したものが目指すものは何なのか?

それは「我」々が暮らす街、その歴史に関心を持つてもらい、次世代の「子」「孫」たちへと引き継ぐべき貴重な財産であることを広く認識してもらいたいがためである。古今東西、人々は祭礼をもつて結束を高め、祈りを捧げ、地域愛、郷土愛を育んできた。

柳宗悦は、朝鮮陶磁器への出会いから全国にとどまらず、世界各地の「民藝」を発掘、保存、発信してきた。そのはじまりは「我孫子の地であった。『民藝』の聖

地のひとつといつてもよい。現在にも続く「新しき村」の精神、思想を育み、熟成させたのも我孫子だった。武者小路実篤は我孫子でその発会式を行い、宮崎日向へと歩みを進めていった。

コロナ禍もあり、人と人が交わることが少なくなり、毎年恒例だった手賀沼花火大会から気軽な飲み会まで、人々の絆を深める機会は減少した。徐々に復活してきているものの、一度止まったものを再び始めるのは難しい。雑誌『白樺』も1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災によって終刊となつてしまった。しかし、彼らは歩みを止めなかった。新たな形で動き出し、それぞれの人生を全うし、顕彰される文豪、偉人として評価の対象、地域、郷土の誇るべき「遺産」「財産」である。

だからこそ今日白樺文学館が存在し、彼らを顕彰する記念館として活動を継続しているのである。理念だけではダメだ。動き出さなくてはならない。

昨年の志賀直哉邸書斎修復クラウドファンディングはまさにその第一歩であった。新年度からは、白樺文学館のリニューアル、今後の資料収集資金などのため基金が設置される予定だ。

「文化」を消してしまうのは簡単だ。消したところで、生活をするのにすぐには困らないだろう。しかし失った後、じわじわ効いて来るのが「文化」だ。生活の彩りを失い、人々の会話は空虚なものとなり、いつしかその「文化」が存在したことさえ忘れ去られてしまう。そうして消えゆくならばそれもよいだろう。そうした事例は歴史を振り返ればいくつもある。そして何かの拍子に失われた「文化」が再評価され、脚光を浴びることもあるだろう。

しかしその再評価、ブームを作るためにも、その「文化」を守ることでできた時代に生きた当事者たちが、その保存と活用に最大限の努力を行ったかどうか問われるのである。後世の人々にどう思われるかという気持ちを読者は持てるだろうか。今を生きる我々の言動も時がたてば、歴史として認識され、古文書となり、研究対象として扱われる日が来る。歴史の法廷

に立たされるかもしれないという意識を持つことが、

現在を生きる「我」々が未来の「子」「孫」に対する真摯な責任感といえるのではないだろうか。それは何も政治家や、地位のある人間たちだけが背負うものではない。そのような意味での「当事者」意識を持つて努めるべきであろう。偉そうに言っているが、私自身、功罪を背負いながら、いずれその審判を受けるだろうと覚悟している。稲村という人間の仕事の是非は何年後に問われるのか、将又今既に法廷に立っているといえるのだろうか。

「当事者」意識と「歴史」意識。人間社会の営みというのはつくづくこの二つの間で揺れ動く物語であると思は思う。

志賀直哉たち明治生まれの、大正、昭和の文化人、教養人、偉人など歴史の教科書に出て来るような人々は歴史を生きて、歴史を刻んでいるという覚悟をもった人々が多いように感じる。日記文化の広がり、「当事者」意識と「歴史」意識そのものであろう。

それを彼らの目線にたつて「当事者」意識で想像し、「歴史」として俯瞰し、評価、分析をしていくことが博物館、プロアマ問わず研究を志す者が忘れてはならないことであろう。

「文化」という目に見えない、形に表しづらいものこそ、その意識を理解するために多くの資料、建築、場所（史跡）を保存することは重要である。そしてそれらを後世に貴重であると伝えるために同時に活用、発信すること、我孫子の「文化」として後世に残すことが出来るものと信じている。

我孫子の「文化」とは何なのだろうか。多種多様な意見が聞かれることだろう。貴会の発足は志賀直哉邸保存運動から始まっている。平成生まれの私はまだ影も形もない頃から貴会は活動してきた由緒ある団体だ。ポスト「我孫子・白樺派」という存在は、まさに貴会をその先駆者の団体と考えるものといえよう。次世代のために、引き続き旺盛に活動されることを祈念している。（完）

「稲村雑談寄稿——我孫子の文化を守る会へ——」 を読んで

美崎 大洋

稲村氏の中身の濃い連載が終了した。「白樺派と我孫子の文化」について論じた連載であった。

現在、「文化都市」とも言われる我孫子市の文化は大正時代初期白樺派のメンバーが、多くの文化人を我孫子に引き寄せた結果といえよう。

白樺派のメンバーは我孫子で民藝運動、新しき村などの構想を描き発信した。「白樺美術館設立」を構想発信したのも我孫子の地であった。白樺美術館設立を宣言する「美術館をつくる計画に就て」が発表されたのは大正六年十月号の『白樺』誌上である。「・・・自分達は小さくてもいい、生々とした、深い生きた喜びの感じられる、真の天才と一堂に会して敬虔を感じと深い人類的な喜び、愛の感じられる美術館をたてたく思っている。・・・場所が東京か。東京のご近くにする。・・・」と熱い想いを述べている。その建設のための寄付金は彼らの本拠地「千葉県我孫子町弁天山志賀直哉方」に送るよう書かれている。ひよつとすると我孫子もこの美術館の候補地にあったかも知れない。しかし残念ながら、この計画は関東大震災後、『白樺』の発行が困難になり消えてしまった。

白樺文学館に白樺派に関する、特に我孫子時代の資料が少ないのは文学館の生い立ち（設立の経緯）に理由がある。白樺文学館は、佐野力氏（日本オラクル設立者、東証一部上場後、同社代表取締役会長兼最高経営責任者（CEO）に就任）によつて、白樺派文人たちの活動を広く次代に伝えるため設立、2001年公開された。基本構想、資料収集などは、武田康弘初代館長を中心に行われたものでいわば個人が集めたものを展示するもので限界もあった。約8年間の私営の後、我孫子市に移管され、市が運営を任されたが、他の博物館、文学館がスタート時に公的な力や豊富な資金で設立されたのとは違い設備面、資料の量や質でも異なる。

今後、我孫子市としてやらなければならないことは

文学館自体のリニューアルによる設備の充実と関係資料のさらなる蒐集であろう。設備（防犯設備含む）、展示や、収蔵スペースが充実すれば友好美術館、博物館からの資料の借用も今までよりスムーズにいくのではないかと。

稲村氏はこの連載で「我孫子にとつて白樺派を大事にする意味があるのか、活用するのが本当に我孫子のためであるのかどうか、それをする機運があるのか、醸成できるのか？」と我孫子市民に問いかけている。偶々「我孫子の文化」を冠する当会はこの問いかけとともに「我孫子の文化を守る会」として白樺派、白樺文学館をどう考えるかについて答えを出さなければならぬであろう。

放談くらぶ 『新田次郎が我孫子で過ごした五年間』 に参加して

芦崎 敬己（会員）

昨年（二月一日（月）午後二時から、我孫子の文化を守る会の「放談くらぶ」がアビスタ第二学習室で開かれました。

講師は、当会の副会長の村上智雅子氏、演題は「新田次郎が我孫子で過ごした五年間」。当日は、曇りがちでしたが昼には晴れ間も覗き、まずまずの天気。

会場は、テーマに取り上げた作家の





人気や、山岳小説の分野を切り開いた作家としての人気もさることながら、実は講師の個人的な人気で参加している方も多くいるようです。開会前に講師に挨拶する姿が幾人も見受けられ、早くから会場の

席が埋まってきました。

私にとっての新田次郎は、大変お恥ずかしいが、映画になった「八甲田山 死の彷徨」(一九七七年公開)の作者としての知識がありません。

しかし、本講演の中でも村上氏も触れていましたが、以前の放談くらぶで気象学者の「岡田武松」を取り上げた時に、気象庁の富士山観測所の開設に新田次郎が関わったと説明のあったことをおぼろ気ながら思い出しました。何れにしても私にとつては、その程度の浅い知識しかありませんでしたので、関連する事項を調べた内容も加筆しました。

講演の主眼として

はじめにと題して、村上氏は、大正時代、志賀直哉や柳宗悦が我孫子で新婚生活を送り、子を育て創作に励んだことは多くの人が知っていることだが、昭和に入り山岳小説家として知られる新田次郎が我孫子で

新婚生活を営み、子を育て、『ラジオゾンデ』という書を書いたことはあまり知られていない。我孫子で過ごした新田次郎の五年間に光を当てて探ることを主眼にしている。今回の放談くらぶの方向性を示された。(写真は岡田武松)

そして、藤原寛人としての足跡に大きな影響があった、布佐村(現・我孫子市布佐)生まれで中央気象台長の岡田武松との関連を三人の年譜の中で見ていくことになります。



新田次郎の略歴

ふじわらひろと

新田次郎は、本名を藤原寛人といい、一九二二年、明治四五年六月六日(七月二十日)からは大正元年、長野県諏訪郡上諏訪町角間新田(現在の諏訪市)に父、藤原彦、母りゑの三番目の次男として生まれました。そこで、のちにペンネームを角間新田の次男坊の意味で、「しんでん」を「につた」と読み替えて付けました。ちやうと洒落た付け方です。

藤原家の祖先は、諏訪藩に仕える郷土で、郷土とは江戸時代に戦が無くなり、武士の身分のまま農業に従事した者や、武士の待遇を受けた農民です。平時は農業、戦時は軍事に携わった下級武士ですが、藤原寛人の祖父光蔵は、上諏訪の町長をしていて、藤原寛人が三歳から九歳までの間は、祖父に預けられ四書五経の素読をしたとのことでした。

諏訪藩は、信濃国諏訪郡周辺を領有した藩で、高島藩とも呼ばれ、藩庁は高島城(長野県諏訪市)です。

一九一九年、大正八年に高島尋常小学校に入学し、百人一首に遊び、俳句に親しみました。一九二五年、大正一四年には旧制諏訪中学校(現・諏訪清陵高校)に入学し、歴史部を創設しました。その後、一九三〇年、昭和五年に無線電信講習所(現・電気通信大学)に入学し、一九三二年、昭和七年に二〇歳で中央気

象台に入庁します。この時、富士山観測所に勤務します。

因みに、富士山観測所は、一九三二年、昭和七年に中央気象台が富士山頂東安河原に「中央気象台臨時富士山頂観測所」を設置し、一九三六年、昭和十一年に剣ヶ峰に移転、「富士山頂観測所」となりました。

その後も、一九四九年昭和二十四年に「富士山観測所」、一九五〇年、昭和二十五年に「富士山測候所」と改称しました。しかし、施設の老朽化や観測技術の発展により、富士山レーダーは一九九九年、平成十一年一月一日にその役割を終えたとあります。

村上氏は、藤原寛人の幼年から青年時代を「努力と研鑽」の時代であったと語っています。

妻・両角ていの生い立ち

むかし

両角ていは、一九一八年、大正七年に一月六日に長野県茅野市に生まれました。父は、小学校の校長で別居しており、母は農業を営んでいました。四人姉弟の長女で、活発な「女将」と評判があたりませんでした。

一九三二年、昭和六年に諏訪高等女学校(現・諏訪二葉高等学校)に入学しましたが、寄宿舎で周囲に馴染めずに図書館でペスタロッチを乱読したとのこと。ペスタロッチは、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチで、一八世紀後半から一九世紀にかけてスイスで活躍した、教育実践家であり思想家と言われています。

またこの時期、我が国の作文教育などの国語教育で有名な大村はま(大村濱氏に庇護を受けました。



一九三四年、昭和九年には、父の命により諏訪高女を中退し、父の身の回りの世話のため小学校に住んだ時、音楽の教師から求婚されますが断りました。(写真は藤原てい)

この頃のていの生き様を村上氏は、「忍耐と反骨」と意味付けています。

藤原寛人・ていの結婚と我孫子時代

一九三八年、昭和十三年春、寛人は、布佐氣象出張所に転勤します。それまでは、大手町の官舎の隣の叔父 藤原咲平宅に寄宿していましたが、布佐に来て宿舎ができるまでは第四代中央氣象台長になった岡田武松の兄の金太郎宅に寄宿していたとのこと。布佐氣象出張所では、ラジオゾンデの観測と研究に励みます。この時は、布佐氣象出張所は、正式には発足されてなく、官舎など建物も建設中でした。六月十九日に観測を開始します。

この出張所は、一九三四年、昭和九年の室戸台風を切っ掛けに岡田武松が氣象通信網の必要性を唱え、布佐町と交渉して、一九三八年、昭和十三年に氣象布佐出張所として設立されたものです。

布佐では、寛人は、テニスに夢中になったとのこと。テニスは、一八七八年、明治十一年頃に我が国に初めて持ち込まれ、当初は横浜や神戸などの外国人



新田 次郎・藤原 てい夫妻、「サブローの日々はすぐ出し」から
(原典:山と溪谷社刊「よくわかる新田次郎」グラフィア)

居留地で
行われてい
ましたが、
徐々に日
本人の中
にも広まり、
昭和元年
頃には日
本人選手
がデビス
カップ戦に
出場する
程になっ
ていたよ
うです。
昭和一
三年冬に、
寛人は、疑
似赤痢に
罹ります。

しかし一ヶ月で治りましたが、一ヶ月も寝込んで、気が弱くなっている時に父親の勧めでていとお見合しました。周りの勧めもあり、トントン拍子で結婚に至りました。

この寛人がお見合いに至る部分は、「新田次郎全集 完結版11.『白い花が好きだ』より引用し、講演の中で田中由紀氏により朗読され、情感あふれる朗読で当時の情景や寛人の感情までも感じられ、講義が一層立体的になりました。

布佐氣象出張所での生活

村上氏は、布佐氣象送信所に関することが、「我孫子市史研究」5(一九八一年刊・市民図書館蔵に掲載の吉田芳夫氏の『布佐氣象送信所』の歩み―創設を中心にして―に詳しく書かれていることを紹介された。(左写真は中央氣象会布佐送信所)

一九三九年、昭和十四年四月四日、布佐氣象出張所が正式に開所されます。初代所長は、山本義一氏(後の東北大学教授。官舎は、布佐町初めの、鉄筋コンクリート造りで、高さ三〇メートルの大鉄塔が立ち、住宅棟も備えていて、とても目立つたと言われています。

その後、同、

昭和十四年、五月十三日に、藤原寛人と両角ていは結婚しました。暫くは藤原家に同居していましたが、完成した官舎に住むことになりました。

しかし二人の生活は、寛人は独身時代と変わらずに氣象観測、テニス、

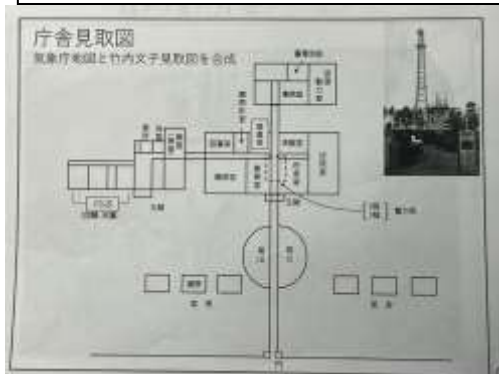


研究の毎日、ていはひたすら夫の帰りを待ち侘び、夫を支える生活だったと言われています。そのため度々けんかをしていました。(写真は夫妻が暮らした庁舎 住居棟・軒の中央)

後年、新田次郎の逝去後、ていは、『わが夫新田次郎』一九八一年刊)で、敷地内の露場(観測機器を置く芝生)でラジオゾンデを上げる夫の姿を、初めは科学者として誇らしく見ていたが、誇らしさを抑える様子に稚氣を感じてきたという。ていからすると夫はまるで子どもだとして落胆したという。夫は、「新婚の夢を語ることもなく、食後は書斎にこもりラジオゾンデの結果をまとめる作業に没頭している。一日待ちくたびれ、話し相手の無い自分の気持ち分かって貰えない、味気の無い日が過ぎて行くと書いています。家で待っている時に夫の本棚の本を読んだ。ある時、かつて詩人の上田敏の詩集を東京で自分が贈った本が全集の形で並んでいるのを見付け



庁舎見取り図(竹内文子氏の見取り図を合成)



てい夫妻が暮らした庁舎 住居棟・軒の中央

て驚き、何故その時に「持っている」と言ってくれなかったのかと夫の心遣いか冷笑かと揺れ動くていの気持ちを感じている。部分も朗読があり、心のひだに触れた感じだ。

この時代の二人の生活を村上氏は、「抗いつつ和合」と表しています。

ラジオゾンデとは

さて、度々出てくる『ラジオゾンデ』という言葉ですが、多くの方は、聞き覚えがあると思います。改めてここで少し整理しておきたいと思います。

一言でいえば、高層気象観測器です。

気象庁のホームページによると、「ラジオゾンデは、上空の気温、湿度、風向、風速等の気象要素を観測する気象観測器です。気象庁では、ラジオゾンデをゴム気球に吊るして飛ばし、地上から高度約三〇キロメートルまでの大気の状態を観測しています。ラジオゾンデによる高層気象観測は、世界各地で毎日決まった時刻（日本標準時九時・二時）に行われており、気象庁では、全国一六か所の気象官署や昭和基地（南極）で実施しています。この他、海洋気象観測船でもラジオゾンデによる高層気象観測を行っています。ラジオゾンデによる高層気象観測で得られたデータは、天気予報の基礎である数値予報モデルや、気候変動・地球環境の監視、航空機の運航管理などに利用されています。」とあります。

このラジオゾンデは、当時は毎日一度気球を使って、高層大気の状態を気象情報として得ることで、天気予報の基礎情報や台風等の防災に不可欠な情報としていました。

しかし、社会が徐々に戦時色が強くなつて行き、気象情報は重要な軍事機密情報として位置付けられ、のちに気象報道管制が行われてきました。

こんにちでは、複数の気象衛星を使って世界気象衛星観測網を地球全体に張り巡らせて、情報を共有し当時とは全く様相が異なつてきています。

さて、寛人は、日中戦争の拡大の中で同僚たちが出

生していく状況を見て、「ラジオゾンデ」をまとめることに専念します。人手が減つて行く状況での操作マニュアルとしてのまとめる意味合いが相当あったとのことでした。

一九四二年、昭和一七年に『ラジオゾンデ』は刊行されました。本のはしがきを岡田武松が、添え書きを伯父の藤原咲平が担いました。

その頃、母島測候所に単身赴任しますが、中央気象台長になった伯父の藤原咲平より満州行を打診されます。

満州時代

一九四〇年、昭和一五年に長男正弘が生まれ、初めての男の子に夫も親戚も大いに喜び、子育てに専念し、寛人も仕事に邁進した時代がありました。

その後、一九四三年、昭和一八年に新京の満州国中央気象台に赴任する寛人と共に一家は満州に渡りました。もとより、ていは幼い時から満州に憧れていて、寛人は昇進のためでした。高層気象科長になりました。

この年、後に数学者になる次男の正彦が生まれ、一九四五年、昭和二〇年、長女咲子が生まれました。新京での平和な生活は、突如として破られ、寛人は、ここでソ連軍の捕虜となり、延吉収容所で一年間技術者として使役の抑留生活を送りました。一方、妻子四人は、引揚者として過酷な逃避行を余儀なくされました。

帰国と作家への道

一九四六年、昭和二一年に凄絶な引揚げ生活を経て、妻子は九月に、寛人は一〇月に満州より引き揚げ帰国しました。間もなく寛人は中央気象台に復職できましたが、伯父の藤原咲平は公職追放となりました。気象台はブラック建で、組織は混乱し、暫く仕事はありませんでした。

そうした状況の中、帰国後に妻といが抑留生活の体験をもとに、遺書のもりで小説として記した『流れる星は生きている』（一九四九年刊）がベストセラーと

なり、これで一家の生活が楽になりました。

ていの作家デビューに刺激を受けて、寛人は気象台に勤めながら執筆活度に奮奮しました。原稿を出版社などに持ち込みますが、取り上げて貰えませんでした。

ところが、一九五一年、昭和二六年、『強力伝』でサンデー毎日第四一回大衆文芸に応募すると見事に一等に輝きました。その後、「強力伝」で一九五六年、昭和三十一年の第三四回直木賞を受賞しました。

一九六三年、昭和三八年から一九六五年、昭和四〇年まで富士山気象リーダー建設責任者となりました。

この工事は、後にNHKの番組「プロジェクトX」で「巨大台風から日本を守れ」富士山頂・男たちは命をかけた」と題して、新番組第一回の放送になりました。（二〇〇〇年三月二十八日放送）

この頃に気象測量器の第一人者にして、高層気象専門家として、国連気象学会での発表を行う公務もこなしてきました。

一九六六年、昭和四一年に気象庁観測部測器課長を最後に依願退職しました。

終わりに

新田次郎は、平素から妻に対して自分の気持ちを上手に伝えることが、もしかしたら苦手だったのかも知れない。大正ロマンなどの言葉はあるが、概して大正時代の男性は、上手ではないような気がする。

しかし、面と向かわなければ、妻に宛てたアラスカからの唯一の恋歌の俳句を、講師の村上氏は愛情と優しさを持つて講演の最後に紹介している。

アラスカの 柳絮目に入り 妻こひし

（一九七三年、昭和四八年六月二日）

柳絮は、柳の綿毛で、新京の春の風物詩だそうです。しかし、「二人新婚時代を過ごした布佐町にも柳絮の飛ぶマルバヤナギが当時からある。もしかしたら、若かつたころの二人の思い出に通じる何かがあるのかも知れない」と飯倉章の「新田次郎の俳句と短歌」から引用

して、紹介しています。村上氏は、マルバヤナギは、現在、布佐の宮の森公園内にあるとの話でした。

まとめとして、我孫子市布佐の地は、広々とした芝生の露場と松林、遙かに利根川を望む高台の地で、時代に翻弄されながらも一人の生活の基盤を作った大切な場所です。復活力を我孫子で身に付けた五年間だったであろうと、村上氏は結んでいた。

我孫子を見直す切っ掛けとなる心に残る講演で、企画・構成に工夫を凝らした良いお話を聞かせて頂きました。



第20回 手賀沼統一クリーンデー

牧田 宏恭（会長）

美手連（美しい手賀沼を愛する市民の連合会）が主催する「第20回手賀沼統一クリーンデー」は、我孫子市主催の「2022年度手賀沼ふれあい清掃（第32回）」との共催で、我孫子地区の行事が、去る12月4日（日）実施された。我孫子の文化を守る会も美手連会員団体として会員（*7名）が参加した。

手賀沼公園広場に8時30分集合、9時に実行委員の挨拶と作業の内容・要領の説明、星野市長挨拶に続き、3つのグループに分かれてスタートした。

天候にも恵まれ、当日の総参加人数は318名（実行委員・関係者187名、一般131名）で、内、美手連参加人数69名（我孫子の文化を守る会会員6*1名、我孫子野鳥を守る会15名・ふれあい実行委員会含む、船戸の森の会数名・内*1名は兼当会員など）だった。

美手連以外は「ボーイスカート」「松愛会」「我孫子シ

新田 次郎 氏【山岳スーパースター列伝】から山岳ライター森山憲一氏

ルバー人材センター」などの参加者が目立ち、2つのグループに分かれ、「ふれあい道路沿いゴミ拾い作業」を主にした参加であった。

美手連のメンバーは、公園広場の「ボート小屋」とその近辺のふれあい護岸・沼の浅瀬に繁茂、生息している「ナガエツルノゲイトウ」などの「外来水生植物駆除」を集中して行った。

駆除作業は、沼内に入って「駆除植物・ナガエの採集」グループと、護岸の陸上で受け取った「ナガエの分別・袋詰め」に分かれて、1時間30分弱行われた。

何とこのゴミ（ナガエ）量は、美手連の委員によれば、総量：約600kg・50袋（ふれあい護岸9袋）に他のゴミ1袋にも達した。

上記を含む当日の全体回収量は180kg（外来水生植物含む可燃物100kg、不燃物150kg）であった。

美手連の本日の作業目的は「外来水生植物駆除」であったが、本日の駆除量から手賀沼全域を考えるとその対象となる総量は、見当もおぼつかない「天文学的数値」になるわけであり、これからの駆除活動はどの様にするのか、まずは県・市など行政が根本から真剣に実態を、学者や諸機関を入れて把握・分析し、我々市民団体を含む市民の意見も聞きながら具体的プランを提案し、広く協力・参加の呼びかけを以て進める以外に方法はないのではないかと。

さらに「外来水生植物駆除」もさることながら「自然環境保全」の観点から、国も含む優先課題と位置付け、その一日も早い着手が不可欠と考える。

会報前号の訂正

会報「あびこの文化」第190号記事に誤記訂正がありました。

「訂正部分」

「美手連」の活動について「の報告文中p.7上段 写真の下」

（誤）「手賀沼水生植物研究会」

（正）「手賀沼水生生物研究会」

「手賀沼統一クリーンデー」に参加して

松浦 彩（会員）

12月4日に開催された「手賀沼統一クリーンデー」に参加しました。とても新鮮な体験でした。

私が手賀沼に興味を持ったのは、2年前の夏のことでした。柏駅から常磐線に乗って帰路につくはずが、間違えて我孫子駅に向かっしまいました。何となく降りたところ、我孫子駅前のバス乗り場に設置されている案内板を見て、初めて手賀沼という大きな沼があることを知ったのです。山に囲まれた街で生まれ育って26年間暮らしていた私は、海や大きな湖にいつも憧れを抱いていました。駅から歩ける場所に大きな水辺、と言うか沼があるのなら、ちよとだけ見てから帰ろう、そう思って坂道を降りていったのです。ただ「沼」という言葉に、何かはじめじめした泥とか毒とか、そんな勝手な先入観を持っており、特に期待はしていませんでした。公園坂通りを降りていく辺りから、緑の木々やボートが視界に入り、想像していたより広くて綺麗な場所なのかもしれないと思い、期待に足が速まってくるのが自分でもわかりました。アピスタ側に渡る前の信号待ちをしている時に、遠くの芝生の上に見えた、公園の遊具かオブジェかと思った白い物体は、大きな鳥であることに気づきました。信号が変わって駆け出して、美しい建物を左手に見ながら、ついに目の前に広がる水面を一望して風を感じて…それが手賀沼との出会いでした。その日の手賀沼も穏やかでした。明石の海辺のように、石が敷き詰められた水辺では、釣りをしてる人や裸足ではしゃぐ子供たちがいました。緑地では、さながらスーラの「グランドジャット島」の日曜日の午後のように思い思いに人々がくつろいでいました。コブハクチョウが数羽、のんびりクローバーを食んだり、輝く水面に数羽浮かんでいたりする光景は、まるでロンドン中心部にある公園のようでした。「沼」に対する先入観は、一瞬にして私の心から消え去っていました…。

そうして、我孫子に引越してきた私は、いつ訪れても静かな湖面と気持ち良い風で迎えてくれる手賀沼に癒やしてもらっていました。また、意識して自然のそばで暮らす機会がこれまでになかったもので、いつでもささやかな、しかし新鮮な驚きがありました。ある時はダイサギがボートのそばで次から次へと魚を飲み込んでいるのを目にしました。オオバンがアビシルベのイラストレーションと同じように巨大な足を出して赤い目を光らせているシーンに出くわした時は、思わずにんまりしました。コブハクチョウがたくさん浮かんでいるところを見ては、故郷の石狩川でオオハクチョウが絨毯のように川辺を埋め尽くしていた光景を思い出して郷愁を感じていました。

そのように、手賀沼に対して愛着を感じているうちに、SNSで清掃活動をしている団体を見つけて、参加したいなと思うようになったのですが、自宅から遠い場所に朝早くから集まる、SCVに乗る等、夜遅い勤務で車も自転車も持っていないインドア派で面倒臭がりの自分にとっては、初めての清掃活動としてハードルが高く、きらきらした写真を眺めるに留まっていた。

いつまでも実現されないまま仕事に忙殺される日々が続いていたある日、第190号の会報で手賀沼統一クリーンデイの募集を見かけて「場所は手賀沼公園多目的広場」とあり、これなら大丈夫かも!と直感参加を申し込んでから、HPをじっくり眺めました。

汚れても構わない服装でということでしたが、賃貸暮らしで庭仕事もなく、物をたくさん持たない主義なので、汚れても良い衣服というものを持つておらず、かと言って、汚れても良い服をわざわざこの日のために買うというのも何か違うと思い、結局ゴム長靴だけを用意することにして、大型のスパーを何軒か訪ねたのですが一向に見つかりません。HPの写真ではほとんどの参加者がゴム長靴を履いているように見えたので残念に思いましたが、仕方なく普段着・普段靴のまま参加することにしたのでした。

クリーンデイ当日はとても清々しく、気持ちの良い

青空が広がっていました。湖面は太陽に照らされて輝き、鴨やオオバン、ユリカモメがのんびり過ごしていて、穏やかな朝でした。冬なので当然虫も飛んでおらず、暑すぎず寒すぎず、作業には絶好の気候でした。「カッパまつり」のようにたくさんの人たちが集まって、お揃いのウィンドブレーカーを着こなした団体も多く、



きちんと開会式まで行われていたので、作業が何となく始まるのかと想像していた私は少し驚きつつも、これから始まる!というわくわく感に包まれていました。ゴム手袋を支給してもらって見たことのないくらい長いもの等、色々なサイズがあつて選ぶことができました!

3グループに分かれるところから作業は始まりました。長靴がないから、もしかして大したことはできないかもしれないと思っ



ていましたが、刈り取られた外来種の水草やゴミを集めて袋に入れる係があつたのでホッとして作業に取り掛かりました。予備知識無く来てしまったので、続々と集まってくる水草が何という名前なのかわからないまま、ひたすら袋が重くなるまで水草を詰め続けました。用意してもらったブルーシートの上に、かごから振り落とされた水草たちは、葉っぱにポリウムがあつて長くてとにかくかさばるものと、貝割れのように小さな密度の高い葉っぱで泥まみれの重たいものと、主に二種類あるようでした。何という名前なのか聞いてみたいと思いつつも、色々と地上で会話するのは、柵の向こうに降りて刈り取る作業を黙々と続けている人たちに対して失礼な気持ちだったので、なるだけ黙って袋に詰め込みました。刈り取る作業を担当した人たちは、長靴と

肩まである長手袋を着用して泥にまみれながら、水草をひたすら刈ってかごに詰めて、それがいっぱいになったら地上の人たちに手渡して、空のかごを受け取った。また黙々と戻って行くのでした。泥まみれの水草はとても重く、すぐに袋がいっぱいになるので、道路脇まで何度もふうふう言いながら引きずって行きました。長くてかさばる水草は、袋に入れるたびに泥がびんぴんはねてオーバーコートに黒い染みを作っていました。汗をかいてちよつと拭おうにもゴム手も手首もドロドロになっていて、首を捻じ曲げてコートの二の腕の部分に額の辺りをそつと押し付けました。水草でばんばんになった袋はあつという間に山積みになり、回収車が来てくれてどんどん運ばれて行きました。缶やペットボトル等想像していた普通っぽいゴミはほとんど見かけず、大きめのタニシがころんと1個紛れていたときは、下に放つて戻してあげました。一緒に作業していた女性たちのジャケットが泥だらけになっていくのが目に入り、大変そう、かわいそう、と思つていて、ふと自分の体に目を遣ると同じくらい泥まみれになっていることに気づくのでした。

あつという間に時間が経ち、午前中が終わろうとしているようでした。腕時計はなく、泥だらけの手首をポケットに突っ込んでスマートフォンを取り出すわけにも行かず、誰かがもうそろそろ終わりの時間だと言っているのを耳にして、もうそんな時間なんだと思ひました。そこで集中力が途切れて、苦しくなつて黒い手でマスクを外して深呼吸をしました。皆、終わる準備に入り、長靴のある人たちが鎌やブルーシートを綺麗に水洗いしてくれていました。

私は新鮮な空気を吸うためにマスクを何度も外して汗を拭おうと無意識に黒い手を額に伸ばして止めてを、何度も繰り返していました。もう日が高く昇つていたので、作業を始めた頃の気温よりもぼかぼかしていました。他の人たちが脱皮するかのように、泥だらけの衣服や靴を脱いでさっぱりしているのを見ては、自分もそんなふうになればよかったのかもしれないとぼんやり考えていました。ごみ拾いが終わつたらしく、小

学生の子供たちが笑顔で歩きながらたくさん戻つてきていて、がやがやと整列しているのが、とてもさわやかな眺めでした。

参加者には全員おみやげがあり、とても実用的でありがたく頂戴しました。あのオオバンがプリントされた白いトートバッグとペットボトルのお茶、それに台所排水溝用の水切りネットでした。

帰つてから私も、オーバーコート、手袋、パンツを脱いでしつかり脱皮しました。外にいた時は全く気づかなかったのに、家に入つてみると泥の付いた部分は下水の様な臭いがひどく、洗濯機に入れる気が全く起きずに、サステイナブルに反していると思いつつもそのままポリ袋に入れてさよならすることにしました。服を脱いだらソファに座つたままうたた寝をしてしまい：気づいたら1日が終わっていました。

後日、ささやかな私の行動が、どのように手賀沼のために役立ったのか具体的に知りたくなりました。まずはあの外来種の水草たちの名前を調べようと思つてインターネットを検索しましたが、画像では花が咲いて綺麗に撮影されていたり刈り取られる前の姿だったりして、いまいちこれだったと確信が持てません。図書館に行けば何かわかるかもしれないと思つて足を運んだところ、資料を探しているうちに、本棚で『手賀沼浄化を考える市民講座』という文字が目に入りましました。とても古い本だけれど、ぱらぱらとめくつて目を通すと初心者にもわかりやすそうで、何冊かのシリーズになっていて読み応えもありそうでした。そして、この報告記の執筆時現在、2巻の途中まで読んでいます。今のところ知り得たのは、生活排水で手賀沼がとても汚れてしまったこと、水を汚さないように生活する個人の意識が大事だということです。

念願の清掃活動に参加したことによって、自分の意識が少しずつ変わつていることを実感しています。これから、自分にできることが何なのか、本を読みながらちよつとずつ学んでいこうと思つています。

あびこだより104号

「日本社会は男女平等？」

青山学院大学名誉教授 関 英昭

「すべて国民は、法の下に平等であつて、性別・門地により、政治的、経済的又は社会的に差別されない。」これは男女平等を謳つた憲法(14条)の条文です。この規定は独立したものでなく、「国民は、個人として尊重される」(13条)や「憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない」(12条)といった条文と一緒に解釈されなければなりません。明治憲法にはこのような規定はなく、むしろ皇族や華族等から成る貴族院を置き、家柄(門地)による差別を認めていました。

最近の世界経済フォーラムの「男女格差報告書」によると、日本は140数カ国のうち120位前後に位置しています。これは、教育・健康・政治・経済の4分野を対象にして男女間の格差を評価したものです。120位という順位は、男女間格差がありすぎることであることを示しています。わかりやすくいえば、日本では男性が優位な立場にあり、逆に女性の地位はかなり低いということです。なんとも情けない話ですが、それが我が国の実態です。「かかあ殿下」や「亭主関白」などという表現がありますが、それは一面的な表現かもしれません。憲法が保障する「男女平等」は、いつ実現するのでしょうか。

EUに加盟している国々では、競つて男女平等社会の実現を図ろうとしています。EU内では労働者は自由に移動できますから、能力ある女性も男女平等がすすんだ国へと就職していくからです。そこで、ドイツ留学時代の経験を踏まえて、ドイツにおける男女平等の実態を見てみたいと思います。ドイツも、どちらかと言えば長い間「男性優位」の社会でした。しかしEU諸国に刺激され、ドイツでも最近は男女共同参画を促進するための法律をいろいろと制定してきました。しか

し公的分野を除き、特に企業分野では効果がありませんでした。そこで2015年にドイツ版「女性クォータ法」を制定しました。それでも不十分ということで、2021年にはこの法律を改正し「男女平等」の強化をはかりました。その変化の姿を数字で見るともりです。

日本が国連の「女子差別撤廃条約」に加盟したのは1985年でした。他の国よりかなり遅れました。それが日本の男女共同参画を遅らせた一因でもあります。しかしこれを契機に、1999年に「男女雇用機会均等法」と「男女共同参画社会基本法」が制定され、男女平等の本格的政策が進められました。しかし、未だに男女の共同参画はうまくいっていません。その理由は、日本の文化や歴史的背景があるからだと思います。また明治憲法以来の法制度の仕組みや国民の意識にも原因がありそうです。

日本とドイツのこれらの実態を数字を見ながら、「男女平等」について考えたいと思います。

「放談くらぶ」で関英昭氏の講演を開催予定
日時 2月11日(土) 14時〜16時
会場 アビシヨップングプラザ(旧エス・)3階会議室1

(プロジェクト報告)

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌恋の歌その19)

ありま山 ゐなの笹原 風吹けば
いでそよ人を 忘れやはする (58)

【現代語訳】

有馬山の近くにある猪名(いな)にある、笹原に生える笹の葉がそよそよと音をたてる。まったく、そよそよよ、そうですね)どうしてあなたのことを忘れたりするのですか。

【語句】

【有馬山】摂津の国・有馬郡(現在の兵庫県神戸市北区有馬町)にある山。昔から猪名(いな)とは組でよく歌

に詠まれている。【猪名(いな)の笹原】有馬山の南東にあたる、摂津の国猪名川に沿った平地。現在の兵庫県尼崎市・伊丹市・川西市あたりになる。昔は、この辺りは一面に笹が生えていた。【風吹けば】風が吹いたら。有馬山から風吹けば、までの上の句全体は、下の「そよ」という言葉を引き出すための「序詞(じよことば)」。【いでそよ】「いで」は「いやはや、まったく」などの意味の副詞。「そよ」は笹がたてるさらさらという葉ずれの音を示すとともに「そうよ」だとか「そんなのよ」などの意味もある。二重の意味を持つ「掛詞(かけことば)」。シヤレのようなものだが、短歌では重要なテクニクのひとつ。【人を忘れやはする】「人」はこの場合、相手の男のことで、「やは」は反語の助詞。どうしてあなたを忘れることができるでしょう、というような意味。

【作者】

大式三位(だいにのさんみ。999?)。紫式部の娘、藤原賢子(ふじわらのかたこ)のこと。母の紫式部同様、一条天皇の中宮彰子に仕え、越後弁(えちこのべん)と呼ばれていた。長保3年(1001年)3歳ごろ父と死別。16歳の時に母は他界、長和6年(1017年)18歳ごろ、母の後を継ぎ一条院の女院彰子(上東門院)に女房として出仕。この間、藤原頼宗、藤原定頼、源朝任らと交際があったことが知られている。その後藤原兼隆のとの間に一女をもうけた(未婚の母?)。その頃に後冷泉天皇の乳母(めのと)となり、30代半ばに太宰大式正三位・高階成章(たかしなのしげあきら)と結婚した。長暦2年(1054年)天喜2年(1054年)後冷泉天皇の即位とともに従三位に昇叙、夫成章も大宰大式に就任したので、大式三位と呼ばれた。歌や実生活から、母の紫式部と比べ、恋愛の駆け引き上手というイメージを持たれることがある。

梅花にそめて大式三位に遣はしける

来ぬ人によそへて見つる梅の花

散りなむ後のなぐさめぞなき

(新古今集 春 権中納言定頼)

待つても来ない人の面影をかさねて梅の花を見ていました。散ってしまった後では寂しさをなぐさめる手だてがありません。

返し

春ごとに心をしむる花の枝に

たがなほざりの袖が触れつる

(新古今集 春 大式三位)

春が来るたび あなたの家の梅に心を奪われておりました。その枝にだれがかりそめにも袖を触れてしまったのでしよう。

関連狂歌

有りあひのたなのささをば吞むときは

ゆでさや豆をさかなとぞする

「さ」は酒の隠語。

有馬山いなおとづれあらざるは

風の便りも忘れやはする

いな…「猪名」と「否」

老いぬれば子供にかへる物ぞとて
いでそよ人を忘れやはする

行き合ふてよう似た者と思ひ出し

いでそよ人を忘れやはする

関連川柳

両脇に月の出て来る有馬山

「…雲隠れにし夜半の月影」(57)と

「…傾くまでの月を見しか」(59)の間の歌

今月の歌恋の歌その20)

やすらはで 寝なましものを 小夜ふけて
かたぐくまでの 月を見しか (59)

【現代語訳】

(こんなことなら)ぐずぐず起きていずに寝てしまったのに。(あなたを待っているうちにとうとう)夜が更けて、西に傾いて沈んでいこうとする月を見てしましましたよ。

【語句】

【やすらはで】「やすらふ」は「ためらう」とか「ぐずぐずする」という意味になる。【寝なましものを】

「まし」は反実仮想（現実には起こらなかったことを、もし起こればと想像すること）の助動詞で、「ものを」は逆接の接続助詞。ここでは「もしあなたが来ないことが分かっていたら」と反実仮想し、「寝てしまっただろうに」と言っている。【さ夜ふけて】「さ」は言葉の調子を整えるための接頭語で、全体で「夜は更けて」という意味になる。【傾（かたぶく）までの】「傾（かたぶく）」は、月が西の山に傾くこと。月は夜の早いうちに東から昇って夜明け前に西に沈んで行くので、「夜明けが近づいた」という意味になる。「まで」は事柄が至り及ぶ限界を表す副助詞で、全体として「月が西に沈むまでの」という意味になる。【月を見しかな】「かな」は詠嘆の終助詞で「月を見たことです」という意味になる。

【作者】

赤染衛門（あかぞめえもん。958?～1041?）和泉式部と並ぶ才媛と言われ、藤原道長の繁栄を描いた『栄花物語』正編の作者として有力視されている。赤染時用（ときもち）の娘と言われているが、実の父は平兼盛（かねもり）とも言われる。衛門は父の官名からとられている。文章博士の大江匡衡（おおえのまさひら）と結婚し、2人の子供を産んだ。

源雅信邸に出仕し、藤原道長の正妻である源倫子とその娘の藤原彰子に仕えており、紫式部・和泉式部・清少納言・伊勢大輔等とも親交があった。曾孫は百人一首73番を作った大江匡房（まさふさ）。夫の死後は尼僧となり、80歳以上まで生きた。

『紫式部日記』に見られる赤染衛門の人物像

「丹波の守の北の方をば、宮、殿のわたりには匡衡衛門とぞ言ひ侍る。ことにやんごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌詠みてよるづのことにつけて詠み散らさねど、聞こ

えたるかぎり、はかなき折節のことも、それこそ恥づかしき口つきに侍れ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出でて、えも言はぬよしびみごととしても、われかしこに思ひたる人、にくくも、いとほしくもおぼえ侍るわざなり。」

（現代語訳）丹波の守殿の正妻のことを、中宮彰子様や藤原道長様の近辺では「匡衡（まさひら）衛門」と呼ばれています（大江匡衡と赤染衛門はおしどり夫婦として知られており、仲睦まじい夫婦仲のため）。特に家柄が良いわけではありませんが、実に風格があつて、「私は歌人よ」という風に何かにつけて歌を詠み散らかすことはしないけれど、知っている限りではちよつとした折節の歌でも、それこそこちらが恥じ入ってしまうような詠みぶりです。この方と比べると、ともすればどうしようもない出来そこないの歌を詠みだして、言いやうもなく気取った振る舞いをして、自分は凄いんだ、と思っている人は、憎らしくもあり、また一方では気の毒だとも思われることです。

時代の変化に伴う言葉の変化

最近、コンビニでのこと。「レジ袋は必要ですか?」と聞かれた前の人が、「大丈夫です」と答えた。店員も「必要ないのだな」と解釈したようである。上司から「飲みに行くが、どうだ?」と声をかけられた部下が「大丈夫です」と答えた。上司は「一緒に来るのだな」と思っていたら、部下は「折角のお誘いですが、私は都合があり、結構です」と否定の意味で使ったという笑えない話がある。評価や今後の出世にも影響しそうな話だ。

「大丈夫です」という言葉はこのように肯定、否定のどちらでも使われる言葉である。上記の例では否定する場合なら「（お誘い頂きましたが）結構です。ダメです」と答え、逆に肯定の意思を表すなら「（都合のことなどは）問題ありません」と答えるべきべきだろう。

言葉は時代とともに変化するものである。代表的なものでは「やばい」がある。やばいとはもともと「不都合であるさま」という意味で決して上品な言葉ではなかった。90年代から「すごい」の意味が派生し、肯定・否定問わずに用いられるようになった。若い女性が「やばい」を連発すると我々の世代は「意味分かっているのかなあ?」と心配してしまう。

時代の変化とともに意味が逆に使われている例は多くある。「貴様」はもとは「貴方様」という尊敬語だった。「適当」や「いい加減」などはその典型だ。本来「いい意味」だが「適当なヤロー」や「いい加減な奴だ」など今は当たり前のように使われる。私は「いい意味」で使う時、「適切」を敢えて使うようにしているが、そのうちこれも意味が変わるかも知れない。

平安時代、「ありがとう」は「有り難し」で「存在するのがまれである」の意味だった。反対は「当たり前」。

最近では「Z世代」や「SDGs」「CSR」など見たことも聞いたこともない言葉や略語が毎日のように新聞やテレビに現れる。家人に聞かれた時は「適当に」答えて後でこっそり調べることにしている。(M)

関連狂歌

赤染がぬねふりをしておつむりも
かたぶくまでの月をみし哉

「つむり」は頭。

下戸ならば寝なましものを酒樽の
かたぶくまでの月ぞさびしき

ややすらはぢちらちらばらばら桜花を
払ひ散らせる風恨めし

やすらかでひま無き者を誘ひきて

霞が関の月を見しかな

霞が関は大名屋敷のあった場所

（参考文献）

淡光ムック 百人一首入門 有吉保・神作光一 監修
（淡光社）
インターネット百人一首各種投稿文

三十八回短歌の会（最終採択の一首） 十一月二十九日実施

痛みなく歩ける事の有り難さ
晴れ渡る朝子の迎え待つ

村上 智雅子

秋の蝶のこりしものの寂しさを
感じておらん地に低く飛ぶ

納見 美恵子

ふるさとより持ち帰り来し秋海棠
庭いちめんを母にささげむ

佐々木 侑

川下り布川の岸边を過ぎ行けば
川面に飛び立つ鯉魚一匹

飯高 美和子

柿一つ塀の向こうに輝いて
武者小路の屋敷でパチリ

芦崎 敬己

「好きだよ」となぜ言ってくれぬと問うきみに
「言葉に出すと軽いから」と言う

美崎 大洋

息とめて祭壇の燈に近づきぬ
あなたは居ぬにあなたは居ぬに

伊奈野 道子

当会の行事予定

□市民のチカラまつり企画部門講演会

「各地の将門伝説・伝承を探る（その2）」

平将門に関する伝説・伝承は千葉県北部から茨城県にかけて数多く残っていますが、群馬県、栃木県、埼玉県にもいくつか残されています。「火のないところ」に煙は立たずの譬え通り、何もなかった場所には伝説・伝承は生まれません。

今回も、それぞれの地域で平将門を特に研究、調査されている方から、「地元の伝説・伝承を披露頂き、わが地域が如何に平将門と関係があるか」をPRして頂き、将門について理解を深めたいと思います。

日時 2月4日（土）14時～16時半

会場 我孫子近隣センター「ふさの風」

我孫子市布佐2972番地の1（布佐駅下車7分）

申し込み不要 先着100名（参加費無料）

講演内容と講演者

① 「秩父地方における平将門伝説の成立と展開」

町田広司氏（地元市郷土史家）

② 「取手に残る将門伝説・伝承―桔梗伝説を中心に―」

飯島章氏（取手市埋蔵文化文化センター）

③ 「将門の王城の地を求めて」

戸田七支氏（我孫子の文化を守る会役員）

□「放談くらぶ」

日時 2月11日（土）14時～16時

会場 アビコショッピングプラザ（旧エス）3階会議室1

講師 関英昭氏（青山学院大学名誉教授）

演題 「日本社会は男女平等？」

参加費、会員無料 非会員三〇〇円

申し込み締め切り2025 佐々木まで

（7ページ）あびこだより「参照ください」

□プロジェクト「短歌の会」

第三十九回短歌の会

日時 1月31日（火）13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

◎短歌に興味のある方、見学＆体験ができます。

未経験者・初心者大歓迎です。

我孫子市の新型コロナワクチン接種状況

接種状況（令和5年1月3日速報値）

オミクロン対応ワクチン（初回接種修了者）

年齢	接種対象者	接種者数	接種率%
12歳以上	109,063	52,081	47.75

5回目

年齢	接種対象者	接種者数	接種率
60歳以上	49,499	27,049	54.65

4回目

年齢	接種対象者	接種者数	接種率
全年齢（12歳以上）	121,665	61,222	50.32

編集後記 今年は十二支では「卯年」、十干では「癸」となり干支は「癸卯（みずのと）」となる▼十二支や十干は数や方角だけでなく、それぞれ独自の意味を持つ。「癸」は、物事の終わりと始まりを意味する他、「揆（はかる）」という文字の一部であることから「種子が計ることができるほどの大きさになり、春が間近で蕾（つぼみ）が花開く直前である」という意味だとされている▼「卯」はもともと「茂」という字が由来といわれ「春の訪れを感じる」という意味。また、「卯」という字の形が「門が開いている様子」を連想させることから「冬の門が開き、飛び出る」という意味があるとも言われる▲昨年のサッカーW杯の際の日本代表チームの活躍は今後の日本サッカーの「春の訪れであり花開く直前」と言える。一方、日本人の熱狂ぶりには驚いた。それまでサッカーを観たことがない人までテレビにかじりついたことだろう。あのような国民の愛国心に基づいたとも言える熱狂は一步誤ると間違った方向に行くことになるので怖い。（美崎）